

第五章 継続的改善に関する問題点に対する認識の違い

5.1はじめに

本章では、全国の大学が ISO14001 を継続させるに当たっての問題点を問題としての認識のされ方の違いを明らかにする。

5.2目的

本章の目的は、全国の大学が ISO14001 を継続させるに当たっての課題を明確にする。又、全国の ISO14001 事務担当者が、各問題についてどのように認識しているかを明確にする。

5.3方法

アンケート調査を元に活動の問題点の認識のされ方を把握をする。（アンケート調査方法は2章を参照。）尚、アンケート結果を取り組み年数別にも考察する。

5.4結果及び考察

5.4.1活動の問題点の認識

5.4.1.1活動の問題点の全体傾向

アンケート調査より得られた問題点に対する回答の内、「全くそう思う」「ややそう思う」の回答を合計したものを「そう思う」とし、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の回答を合計したものを「そう思わない」とした。又、「そう思う」の比率が高い程、重要度の高い問題点と捉え、重要度の順番に問題点を並べた。それらを表5-1に示す。

表5-1 重要度別活動の問題点

分類	重要度の順番	問題点	認識の割合(単位:%)	
			そう思う	そう思わない
問題としての認識が特に高い問題	1	特定の担当者に役割が偏る	92	8
	2	教職員の無関心・周知徹底が難しい	84	14
	3	中心人物の転勤後の継続が難しい	82	18
	4	他人任せで無関心の人が多い	76	24
問題としての認識が高い問題	5	ISO14001 の規格の用語が難しい	69	31
	6	内部監査員の増員と資質の向上が難しい	68	32
	7	大量の文書作成へのモチベーション維持が難しい	66	34
	8	研究・教育活動の影響評価方法が難しい	65	27
	9	学生参加が少ない	64	31
	10	予算(審査費用)の工面が大変だ。	63	34
	11	目的が早く達成してしまう。(活動がマンネリ化してしまう)	63	34
	12	トップダウンの指揮命令がうまくいかない	59	41
	13	法的的理解が難しい	58	39
	14	予算(人件費)がかさむ	49	46
問題としての認識が低い問題	15	認証取得が目的になり、継続的改善への関心は次第に低くなっている	49	48
	16	普段の業務に EMS が浸透していない	48	52
	17	EMS による明確なメリットが認識しづらいという意見が定着している	46	46
	18	事務主導で動いたため、教員との連携が難しい	41	54
	19	側面抽出が難しい	36	64

全体傾向分析は、5.4.1.4に示す。

5.4.1.2 各問題点に対する認識

アンケート調査より得られた各問題点に対する認識と,取り組み年数別に見た問題の認識を,重要度別(5.4.1.1 参照)に図5-1~図5-38に示す.

5.4.1.2.1 特定の担当者に役割が偏る

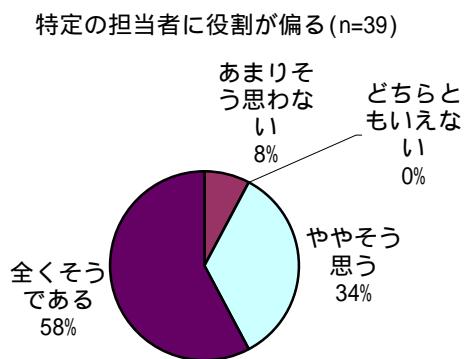


図5-1 特定の担当者に役割が偏る問題に対する認識

図5-1より,全くそうであるが58%と一番多く,ややそう思うの34%と合わせると92%の大学が「役割が偏る」と認識している事がわかった.一方,あまりそう思わないが8%なので,8%が偏っていないと認識している事がわかった.

ほとんどの大学で特定の担当者に役割が偏ると認識している事がわかった.

又,取り組み年数別に見た特定の担当者に偏る問題の認識を図5-2に示す.

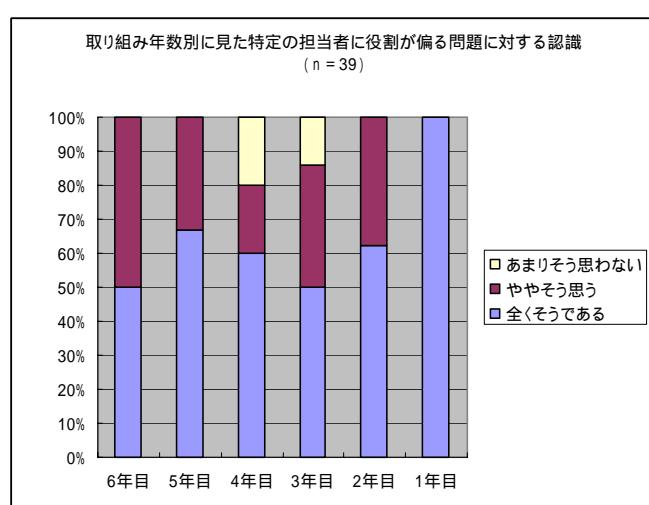


図5-2 取り組み年数別に見た特定の担当者に偏る問題の認識

図 5-2において、そう思う（=全くそうである + ややそうである）の推移（1-6 年目）を見ると、3~4 年目の大学の一部を除き、全ての大学で「そう思う」と認識されている事がわかった。ゆえに、EMS を継続的に改善するに当たり、どの段階においても問題となる事であると言える。

5.4.1.2.2 教職員の無関心・周知徹底が難しい

教職員の無関心・周知徹底が難しい（n=39）

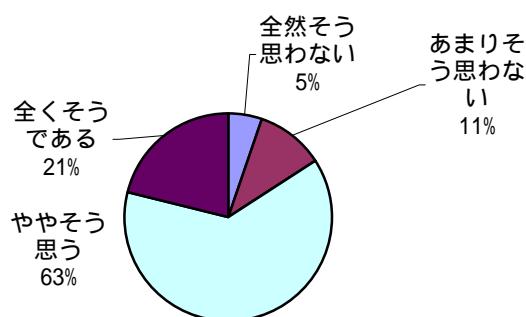


図 5-3 教職員の無関心・周知徹底が難しい問題に対する認識

図 5-3より、ややそう思うが 63% と一番多く、全くそうであるの 21% と合わせると 84% が難しいと認識している事がわかった。一方、あまりそう思わないは 11% で全然そう思わないの 3% と合わせると 34% が大変でないと認識している事がわかった。
ほとんどの大学で教職員の無関心・周知徹底が難しいと認識している事がわかった。

取り組み年数別に見た教職員の無関心・周知徹底が難しい問題の認識を図 5.4 に示す。

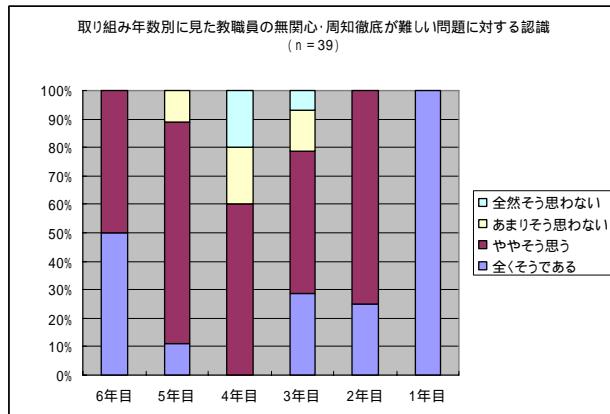


図 5-4 取り組み年数別に見た教職員の無関心・周知徹底が難しい問題の認識

図 5-4においてそう思う(= 全くそうである + ややそうである)の推移(1-6 年目)を見ると,1 年目から 4 年目にかけて「そう思う」の割合が減り,5 年目から 6 年目にかけて再び割合が増加している事から,4 年目までは改善の方向に向かうが再び問題となってくる事が言える. ゆえに,今後 EMS を継続的に改善するにあたっての問題点になると考えられる.

5.4.1.2.3 中心人物の転勤後の継続が難しい

中心人物の転勤後の継続が難しい(n=39)

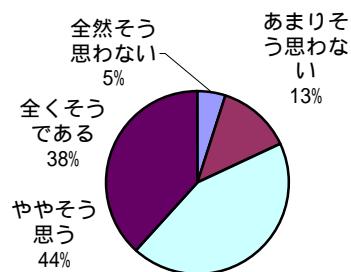


図 5-5 中心人物の転勤後の継続が難しい問題に対する認識

図 5-5 より, ややそう思うが 5.4% と一番多く, 全くそうであるの 38% と合わせると 82% が大変であると認識している事がわかった. 一方, あまりそう思わないは 13% で, 全然そう思わないの 5% と合わせると 18% が大変でないと認識している事がわかった.

ほとんどの大学で, 中心人物の転勤後の継続が難しいと認識している結果となった.

又, 取り組み年数別に見た中心人物の転勤後の継続が難しい問題の認識を図 5-6 に示す.

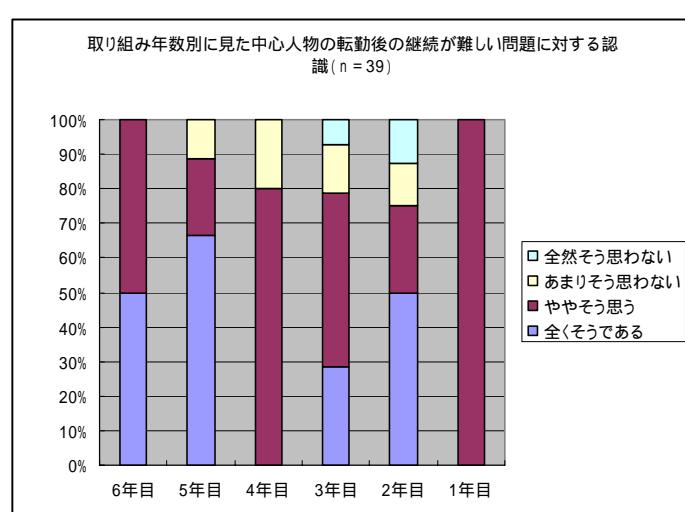


図 5-6 取り組み年数別に見た中心人物の転勤後の継続が難しい問題の認識

図 5-6において、そう思う（=全くそうである + ややそうである）の推移（1-6 年目）を見ると、1 年目の大学は全てそうであると認識し、2 年目からは意見が二つに割れるが、「ややそう思う」「全くそうである」の割合は 2 年目から 6 年目にかけて毎年増加しているので、取り組む年数が増えるにつれて問題になる事が言える。ゆえに、今後 EMS を継続的に改善するにあたっての問題点になると考えられる。

5.4.1.2.4 他人任せで無関心の人が多い

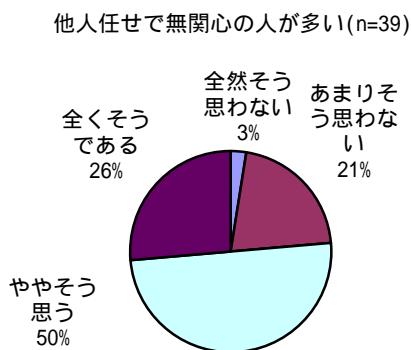


図 5-7 他人任せで無関心の人が多い問題に対する認識

図 5-7 より、ややそう思うが 50% と一番多く、全くそうであるの 26% と合わせると 76% が無関心の人が多いと認識している事がわかった。一方、あまりそう思わないは 21% で全然そう思わないの 3% と合わせると 24% が無関心の人が多くないと認識している事がわかった。

ほとんどの大学で「他人任せで無関心の人が多い」と認識している事がわかった。

又、取り組み年数別に見た他人任せで無関心の人が多い問題の認識を図 5-8 に示す。

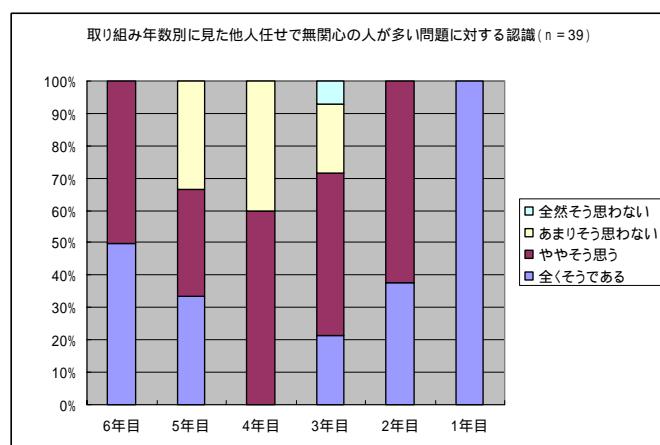


図 5-8 取り組み年数別に見た他人任せで無関心の人が多い問題の認識

図 5-8において、そう思う（=全くそうである + ややそうである）の推移（1-6 年目）を見ると、「全くそうである」と「ややそう思う」の割合が 1 年目から 4 年目にかけて減少し、5 年目から 6 年目にかけて増加しているので、1 年目から 4 年目にかけては改善の方向に向かうが、5 年目から 6 年目にかけて再び問題になってくる事が言える。ゆえに、今後 EMS を継続的に改善するにあたっての問題点になると考えられる。

5.4.1.2.5 ISO14001 の規格の用語が難しい

ISO14001 の規格の用語が難しい（n=39）

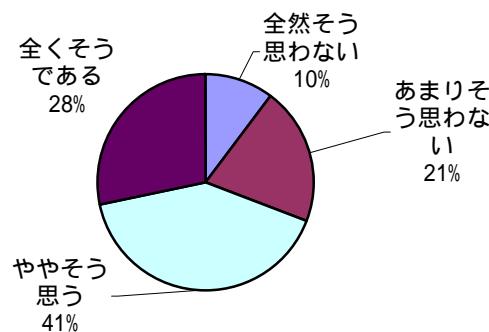


図 5-9 ISO14001 の規格の用語が難しい問題に対する認識

図 5-9より、ややそう思うが 41% と一番多く、全くそうであるの 28% と合わせると 69% が難しいと認識している事がわかった。一方、あまりそう思わないは 21% で全然そう思わないの 10% と合わせると 31% が難しくないと認識している事がわかった。

又、取り組み年数別に見た ISO14001 の規格の用語が難しい問題の認識を図 5-10 に示す。

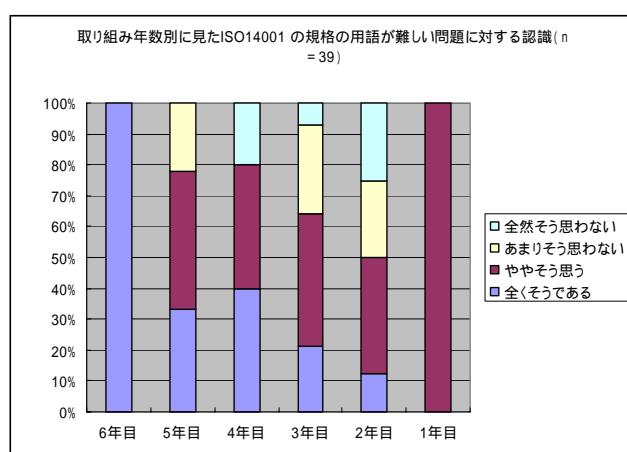


図 5-10 取り組み年数別に見た ISO14001 の規格の用語が難しい

図 5-10において、そう思う（＝全くそうである + ややそうである）の推移（1-6 年目）を見ると、「そう思う」の割合が 1 年目から 2 年目にかけて大きく減少するが、2 年目から 6 年目にかけて少しづつ増加している。これは、取り組み年数別に見た中心人物の転勤後の継続が難しい問題の認識の傾向と似ている（5.4.1.2.3 考察を参照）ので、中心人物の転勤により規格の理解に対する認識が影響されている事が考えられる。ゆえに、転勤後の引き継ぎと同様に、今後 EMS を継続的に改善するにあたっての問題点になると想われる。

5.4.1.2.6 内部監査員の増員と資質の向上が難しい

内部監査員の増員と資質の向上が難しい（n=39）

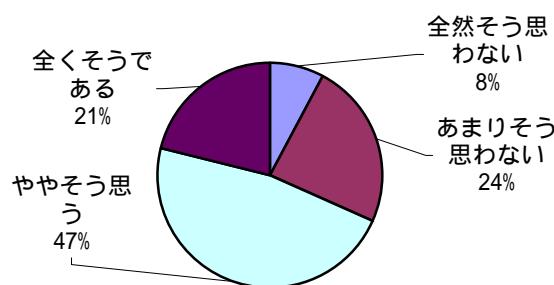


図 5-11 内部監査員の増員と資質の向上が難しい問題に対する認識

図 5-11 より、ややそう思うが 47% と一番多く、全くそうであるの 21% と合わせると 68% が難しいと認識している事がわかった。一方、あまりそう思わないは 24% で全然そう思わないの 8% と合わせると 32% が大変でないと認識している事がわかった。約 7 割の大学が「内部監査員の増員と資質の向上が難しい」と認識している事がわかった。

又、取り組み年数別に見た内部監査員の増員と資質の向上が難しい問題の認識を図 5-12 に示す。

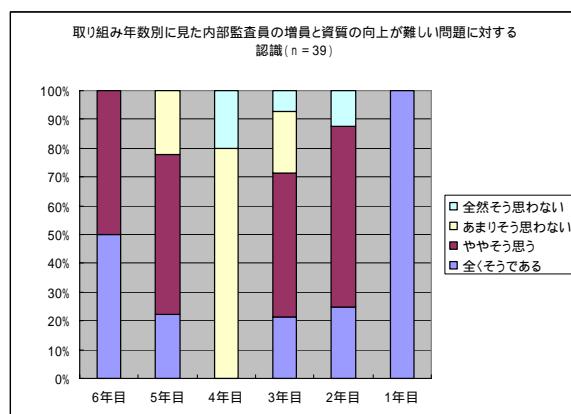


図 5-12 取り組み年数別に見た内部監査員の増員と資質の向上が難しい問題の認識

図 5-12において、そう思う（＝全くそうである + ややそうである）の推移（1-6 年目）を見ると「そう思う」の割合が 1 年目から 3 年目にかけて減少し、4 年目には 0 になるが、5 年目から 6 年目にかけて増加しているので、1 年目から 4 年目にかけては監査の経験を重ねて慣れて来たが、EMS 自体の継続的改善が困難になるにつれて内部監査の重要性を再認識する事が言えるのではないかと考えらる。ゆえに、今後 EMS を継続的に改善するにあたつて、大きな問題点になると見えられる。

5.4.1.2.7 大量の文書作成へのモチベーション維持が難しい

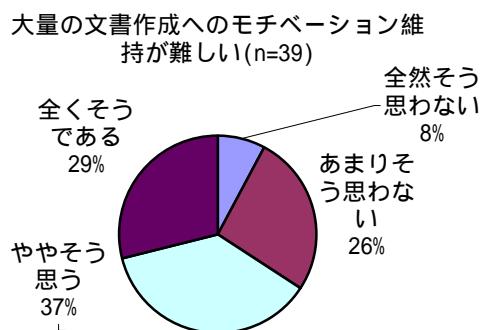


図 5-13 大量の文書作成へのモチベーション維持が難しい

図 5-13 より、ややそう思うが 37% と一番多く、全くそうであるの 29% と合わせると 66% が大変であると認識している事がわかった。一方、あまりそう思わないは 26% で全然そう思わないの 8% と合わせると 34% が大変でないと認識している事がわかった。約 7 割の大学で「大量の文書作成へのモチベーション維持が難しい」と認識されている事がわかった。

又、取り組み年数別に見た大量の文書作成へのモチベーション維持が難しい問題の認識を図 5-14 に示す。

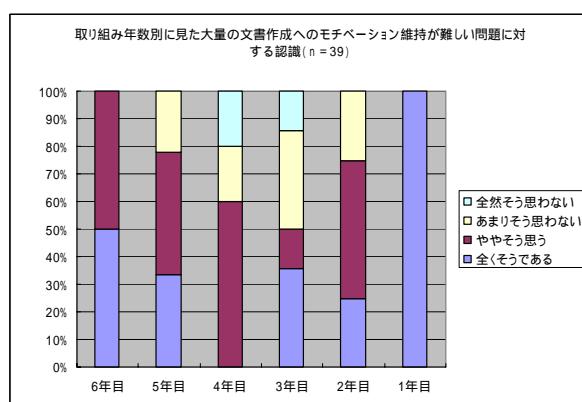


図 5-14 取り組み年数別に見た大量の文書作成へのモチベーション維持が難しい問題の認識

図 5-14において、そう思う（=全くそうである + ややそうである）の推移（1-6年目）を見ると「そう思う」の割合が1年目から3年目にかけて減少しているが、2年目から3年目にかけて「全くそうである」が増え「そう思わない」も増えているので一概に解決されたとは言えない。4年目以降は「そう思う」が増加しているので、モチベーションが下がっていく事が言える。大学によって感じ方が違う事がわかった。

5.4.1.2.8 研究・教育活動の影響評価方法が難しい

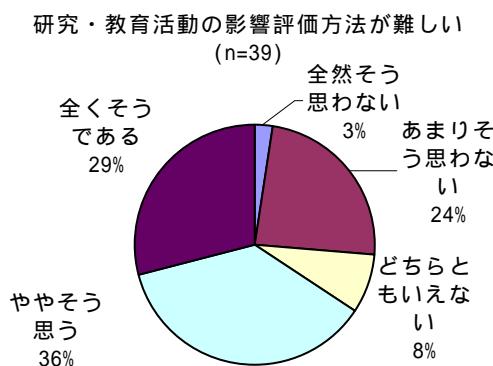


図 5-15 研究・教育活動の影響評価方法が難しい

図 5-15 より、ややそう思うが 36% と一番多く、全くそうであるの 29% と合わせると 65% が大変であると認識している事がわかった。一方、あまりそう思わないは 24% で全然そう思わないの 3% と合わせると 27% が大変でないと認識している事がわかった。どちらともいえないは 8% である事がわかった。

取り組み年数別に見た研究・教育活動の影響評価方法が難しい問題の認識を図 5-16 に示す。

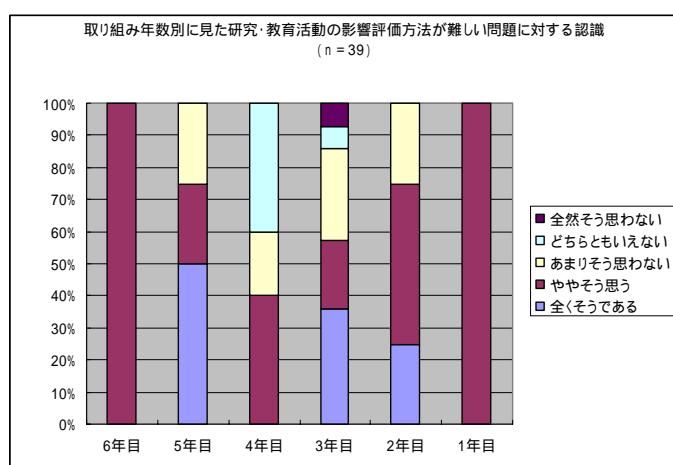


図 5-16 取り組み年数別に見た研究・教育活動の影響評価方法が難しい問題の認識

図 5-16において、そう思う（＝全くそうである + ややそうである）の推移（1-6 年目）を見ると、「そう思う」大学の割合は 1 年目から 4 年目にかけて減少しているが、2 年目から 3 年目にかけて「あまりそう思わない」大学と「全くそうである」大学に分かれているので、一概に解決されたとは言えない。4 年目以降は「そうである」が増加しているので、評価方法の難しさが認識されてくる事が言える。

5.4.1.2.9 学生参加が少ない

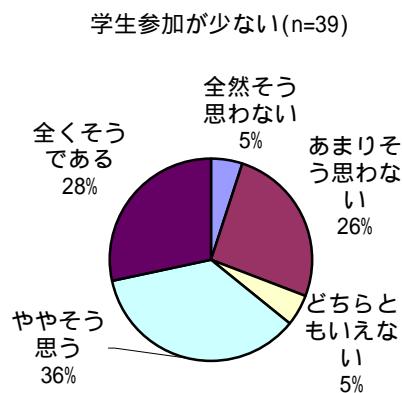


図 5-17 学生参加が少ない

図 5-17 より、ややそう思うが 36% と一番多く、全くそうであるの 28% と合わせると 64% が大変であると認識している事がわかった。一方、あまりそう思わないは 26% で全然そう思わないの 5% と合わせると 34% が大変でないと認識している事がわかった。どちらともいえないは 5% である事がわかった。

又、取り組み年数別に見た学生参加が少ない問題の認識を図 5-18 に示す。

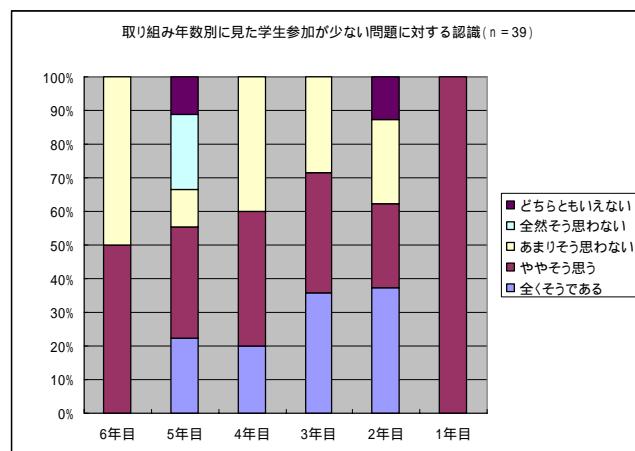


図 5-18 取り組み年数別に見た学生参加が少ない問題の認識

図 5-18において、そう思う（=全くそうである + ややそうである）の推移（1-6年目）を見ると、「そう思う」大学の割合は1年目から6年目にかけて減少傾向が見られるので、取り組み年数を重ねる事で改善されていく事がわかった。

5.4.1.2.10 予算（審査費用）の工面が大変だ

予算（審査費用）の工面が大変だ。（n=39）

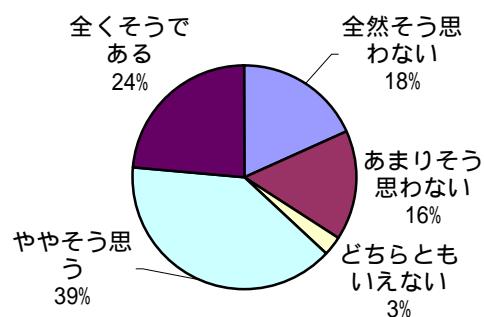


図 5-19 「予算（審査費用）の工面が大変だ」に対する認識

図 5-19 より、ややそう思うが 39%と一番多く、全くそうであるの 24%と合わせると 63%が大変であると認識している事がわかった。一方、全然そう思わないは 18%であまりそう思わないの 16%と合わせると 34%が大変でないと認識している事がわかった。どちらともいえないは 3 %である事がわかった。

又、取り組み年数別に見た予算（審査費用）の工面の問題の認識を図 5-20 に示す。

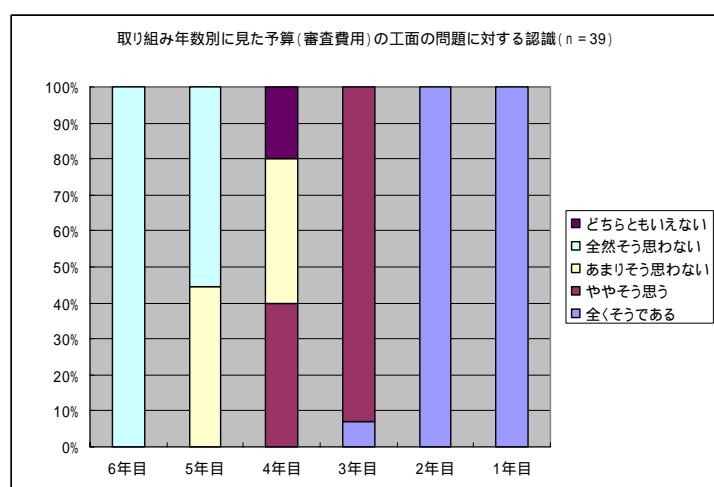


図 5-20 取り組み年数別に見た予算（審査費用）の工面の問題の認識

図 5-20において、そう思う（=全くそうである + ややそうである）の推移（1-6 年目）を見ると「そう思う」大学の割合は 1~4 年目にかけて減少し、5 年目には 0 になり、更に 6 年目には全然そう思わなくなる事より、取り組む年数が増える事により、審査費用への問題意識はなくなると言える。予算を「工面する」のではなく、「必要経費」と認識されていくのではないかと考えられる。

5.4.1.2.11 目的が早く達成してしまう。（活動がマンネリ化してしまう）

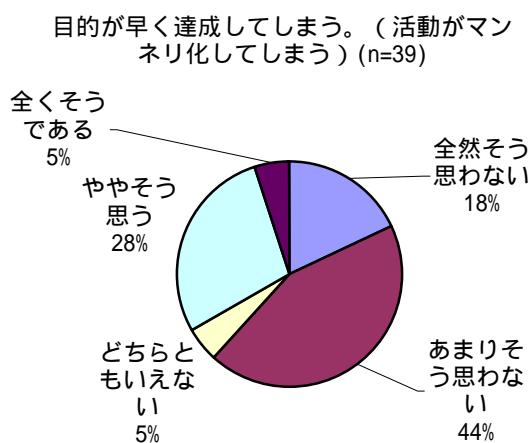


図 5-21 目的が早く達成してしまう（活動がマンネリ化してしまう）に対する認識

図 5-21 より、ややそう思うが 39% と一番多く、全くそうであるの 24% と合わせると 63% が大変であると認識している事がわかった。一方、全然そう思わないは 18% でありそう思わないの 16% と合わせると 34% が大変でないと認識している事がわかった。どちらともいえないは 3% である事がわかった。

又、取り組み年数別に見た、「目的が早く達成してしまう（活動がマンネリ化してしまう）」問題の認識を図 5-22 に示す。

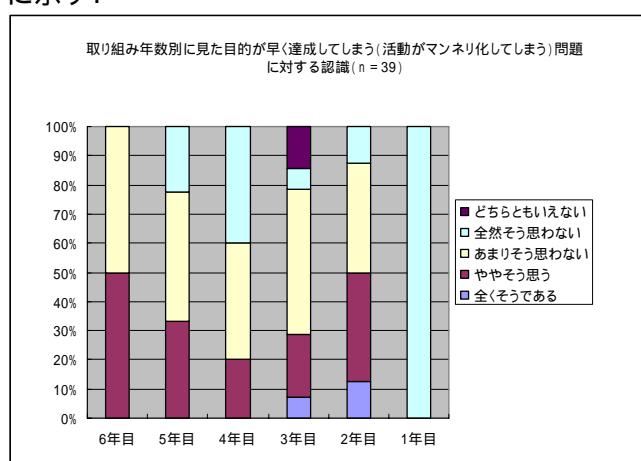


図 5-22 取り組み年数別に見た「目的が早く達成してしまう」問題の認識

図 5-22 より、1年目は全ての大学が「全然そう思わない」と認識するが2年目には激減する。3年目に「どちらとも言えない」と認識する大学があるものの「そうである」は2-4年目まで減少しているので、「2年目で活動のマンネリ化を危惧するが、4年目までは様々な取り組みを行い、4年目以降は活動がマンネリ化し始める（3.4.1.2.2 全国の大学における廃止又は維持管理項目に変更された ISO14001 活動の考察を参照）事が言える。

5.4.1.2.12 トップダウンの指揮命令がうまくいかない

トップダウンの指揮命令がうまくいかない
(n=39)

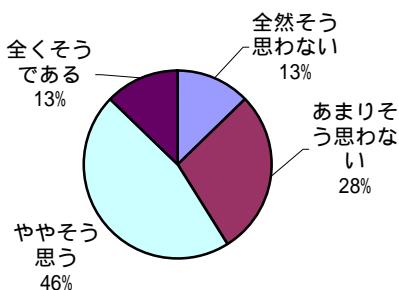


図 5-23 トップダウンの指揮命令がうまくいかない問題に対する認識

図 5-23 より、ややそう思うが 46% と一番多く、全くそうであるの 13% と合わせると 59% が大変であると認識している事がわかった。一方、あまりそう思わないは 28% で全然そう思わないの 13% と合わせると 41% が大変でないと認識している事がわかった。半分強の大学でトップダウンの指揮命令がうまくいかないと認識している事がわかった。

又、取り組み年数別に見たトップダウンの指揮命令がうまくいかない問題の認識を図 5-24 に示す。

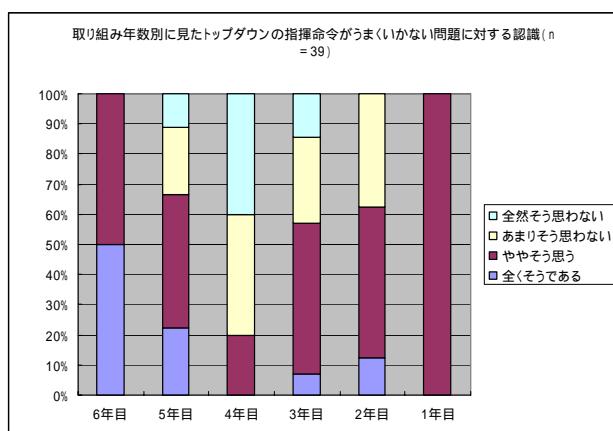


図 5-24 取り組み年数別に見たトップダウンの指揮命令がうまくいかない問題の認識

図 5-24において、そう思う（=全くそうである + ややそうである）の推移（1-6年目）を見ると、1-4年目にかけて「そう思う」大学が減り「そう思わない」大学が増えるが、5年目以降はそれらの認識が逆転する事より、4年目まではトップダウンの指揮命令が浸透するが、5年目以降はトップダウンの指揮命令の浸透が薄れていくと言える。

5.4.1.2.13 法的理 解が難しい

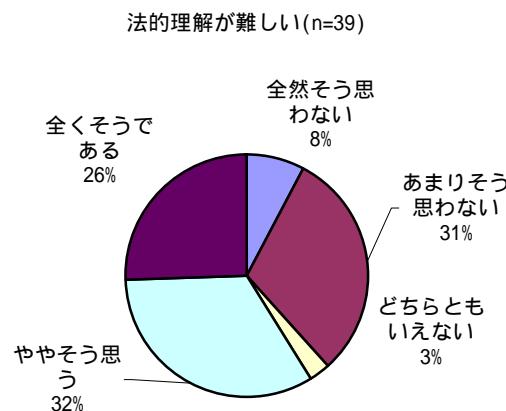


図 5-25 法的理 解が難しい問題に対する認識

図 5-25より、ややそう思うが 32%と一番多く、全くそうであるの 26%と合わせると 58%が難しいと認識している事がわかった。一方、あまりそう思わないは 31%で全然そう思わないの 8%と合わせると 39%が大変でないと認識している事がわかった。どちらともいえないは 3 %である事がわかった。半分強の大学で法律の理解が難しいと認識していることがわかった。

又、取り組み年数別に見た法的理 解が難しい問題の認識を図 5-26 に示す。

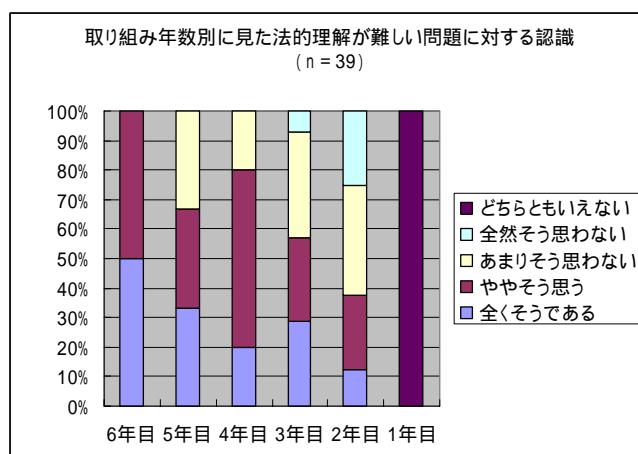


図 5-26 取り組み年数別に見た法的理 解が難しい問題の認識

図 5-26において、そう思う（＝全くそうである + ややそうである）の推移（1-6年目）を見ると、「そう思う」の割合が2年目以降は増加する傾向にあり、取り組み年数別に見た中心人物の転勤後の継続が難しい問題の傾向と似ている（5.4.1.2.3 の考察を参照）ので、規格理解の問題と同様に中心人物の転勤により規格の理解に対する認識が影響されている事が考えられる。

5.4.1.2.14 予算（人件費）がかさむ

予算（人件費）がかさむ（n=39）

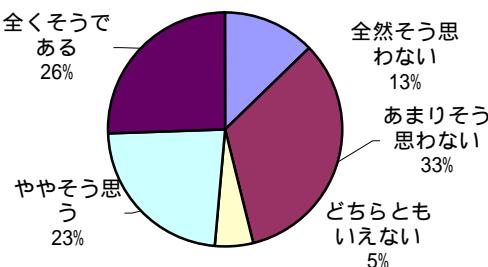


図 5-27 予算（人件費）がかさむ

図 5-27よりあまりそう思わないが33%と一番多く、全然そう思わないの13%と合わせると46%が人件費がかさまないと認識している事がわかった。一方、ややそう思うが23%で、全くそうであるの26%と合わせると49%の大学で人件費がかさむと認識している事がわかった。どちらともいえないは5%である事がわかった。この問題は、意見がほぼ半分に割れる結果となった。

又、取り組み年数別に見た予算（人件費）がかさむ問題の認識を図 5-28 に示す。

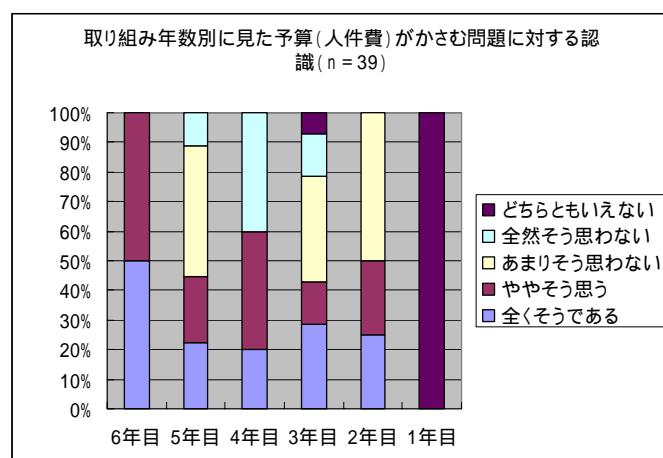


図 5-28 取り組み年数別に見た予算（人件費）がかさむ問題の認識

図 5-28において、そう思う（＝全くそうである + ややそうである）の推移（1-6 年目）を見ると、2 年目～5 年目にかけて「そう思う」大学の割合があまり変わらないが、6 年目には全ての大学で「そう思う」事より、5 年目まではあまり重要視されておらず、大学によって認識が違っていたが、6 年目から問題と認識され始めた事が考えられる。

5.4.1.2.15 認証取得が目的になり、継続的改善への関心は次第に低くなっている

認証取得が目的になり、継続的改善への関心は
次第に低くなっている (n=39)

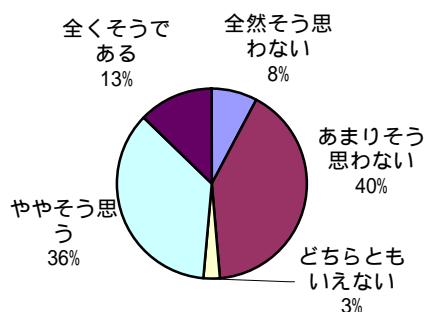


図 5-29 認証取得が目的になり、継続的改善への関心は次第に低くなっている問題に対する認識

図 5-29 より、あまりそう思わないが 40% と一番多く、全然そう思わないの 8% と合わせると 48% が「関心が低くなっている」と認識している事がわかった。一方、ややそう思うは 36% で全くそうであるの 13% と合わせると 49% が「関心が低くなっている」と認識している事がわかった。どちらともいえないは 3% である事がわかった。

又、取り組み年数別に見た「認証取得が目的になり、継続的改善への関心は次第に低くなっている」問題の認識を図 5-30 に示す。

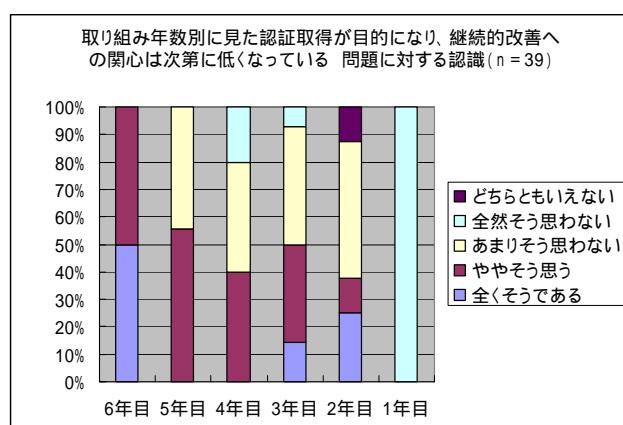


図 5-30 取り組み年数別に見た「認証取得が目的になり、継続的改善への関心は次第に低くなっている」問題の認識

図 5-30において、そう思う（＝全くそうである + ややそうである）の推移（1-6 年目）を見ると、2~5 年目にかけて「そう思う」大学と「そう思わない」大学の割合があまり変わらないので、大学の活動の目的が二パターンに分かれていると言える。しかし 6 年目には全ての大学で「そう思う」事より、認証取得が目的になってしまふと言える。

5.4.1.2.16 普段の業務に EMS が浸透していない

普段の業務に EMS が浸透していない(n=39)

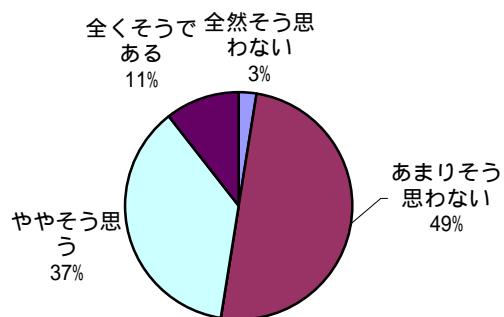


図 5-31 普段の業務に EMS が浸透していない問題に対する認識

図 5-31 より、あまりそう思わないが 49% と一番多く、全然そう思わないの 3% と合わせると 52% が浸透していると認識している事がわかった。一方、ややそう思うは 37% で全くそうであるの 11% と合わせると 48% が浸透していないと認識している事がわかった。

又、取り組み年数別に見た普段の業務に EMS が浸透していない問題の認識を図 5-32 に示す。

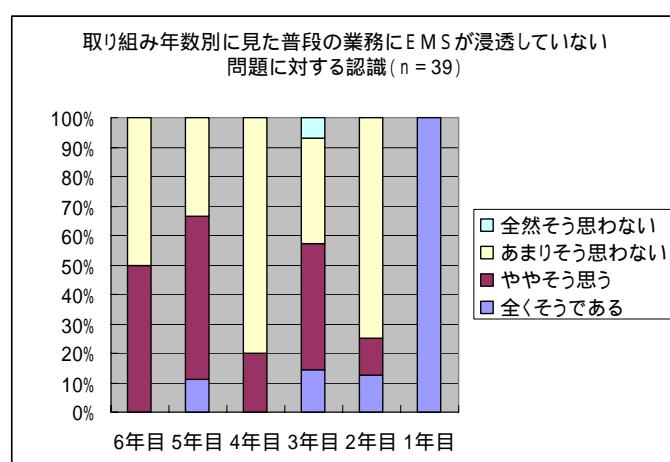


図 5-32 取り組み年数別に見た普段の業務に EMS が浸透していない問題の認識

図 5-32において、「そう思う」(= 全くそうである + ややそうである) の推移 (1-6 年目) を見ると、「そう思う」が 1 年目から 2 年目にかけて激減し, 3 年目に増加して 4 年目に再び激減し, 5 年目に増加して 6 年目は減少し, とばらつきが見られたので取り組み年数と EMS が普段の業務に浸透する問題は相関がない事が言える。

5.4.1.2.17 EMS による明確なメリットが認識しづらいという意見が定着している

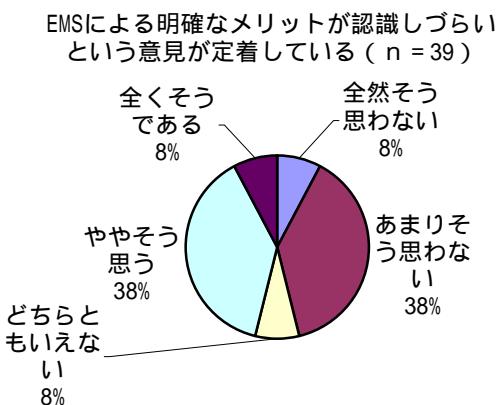


図 5-33 EMS による明確なメリットが認識しづらいという意見が定着している問題に対する認識

図 5-33 より, ややそう思うが 38%, 全くそうであるの 8% と合わせると 46% が EMS による明確なメリットが認識しづらいという意見が定着していると認識している事がわかった。一方, あまりそう思わないも 38%, 全然そう思わないの 8% と合わせると 46% がそうでないと認識している事がわかった。どちらともいえないは 8% である事がわかった。

又, 取り組み年数別に見た普段の業務に EMS による明確なメリットが認識しづらいという意見が定着している問題の認識を図 5-34 に示す。

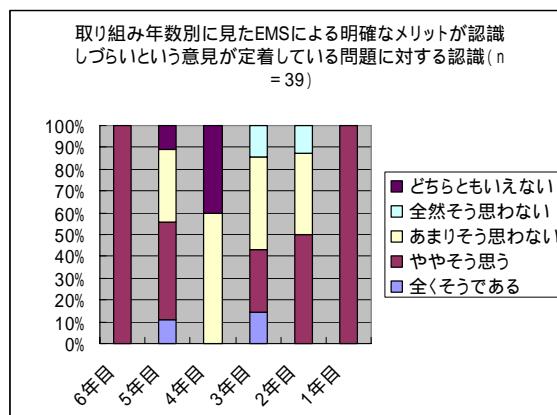


図 5-34 取り組み年数別に見た「EMS による明確なメリットが認識しづらいという意見が定着している」問題の認識

図 5-34において、そう思う（=全くそうである + ややそうである）の推移（1-6 年目）を見ると、「取り組み年数別に見た目的が早く達成してしまう。（活動がマンネリ化してしまう）問題」に対する認識の傾向と似ている（5.4.1.2.11 の考察参照）ので、活動による効果の有無がメリットの認識に影響しているのではないかと考えられる。

5.4.1.2.18 事務主導で動いたため、教員との連携が難しい

事務主導で動いたため、教員との連携が難しい
(n=39)

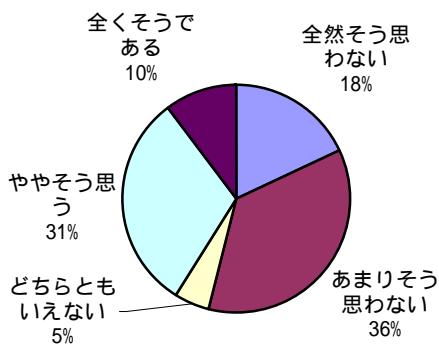


図 5-35 事務主導で動いたため、教員との連携が難しい

図 5-35 より、あまりそう思わないが 36% と一番多く、全然そう思わないの 18% と合わせると 54% が大変であると認識している事がわかった。一方、ややそう思うは 31% で全くそうであるの 10% と合わせると 34% が大変でないと認識している事がわかった。どちらともいえないは 5% で、半分強の大学で、難しいと認識していない事が分かった。

又、取り組み年数別に見た普段の業務に EMS による明確なメリットが認識しづらいという意見が定着している問題の認識を図 5-36 に示す。

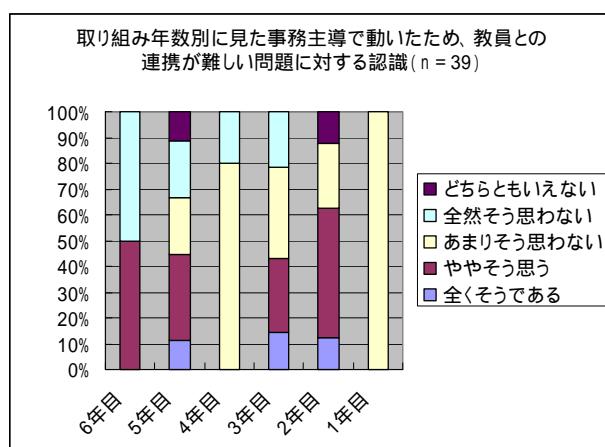


図 5-36 取り組み年数別に見た事務主導で動いたため、教員との連携が難しい問題の認識

図 5-36において、そう思う（=全くそうである + ややそうである）の推移（1-6 年目）

を見ると、1年目と4年目で「そうである」大学はゼロになり、2~3、5~6年目の「そうである」大学数はほぼ変わらない。そもそも事務主導で動いていない大学も含まれているので、一概に言うことが出来ないが、2~4年目で「そうである」大学が少なくなるのは、活動がマンネリ化してしまう問題に対する認識に似ている（5.4.1.2.11の考察参照）ので、因果関係が有る事も考えられる。

5.4.1.2.19 側面抽出が難しい

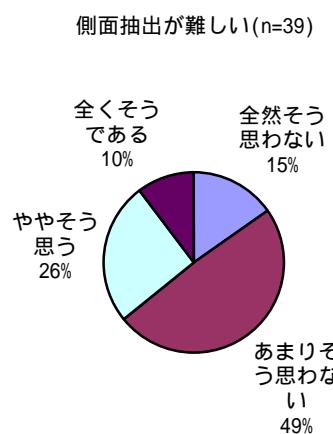


図 5-37 側面抽出が難しい

図5-37より、あまりそう思わないが49%と一番多く、全然そう思わない全くそうであるの15%と合わせると64%が難しいと認識している事がわかった。一方、ややそう思うは26%で全くそうであるの10%と合わせると36%が難しくないと認識している事がわかった。半分強の大学で「側面抽出が難しい」と認識していない事がわかった。

又、取り組み年数別に見た側面抽出が難しい問題の認識を図5-38に示す。

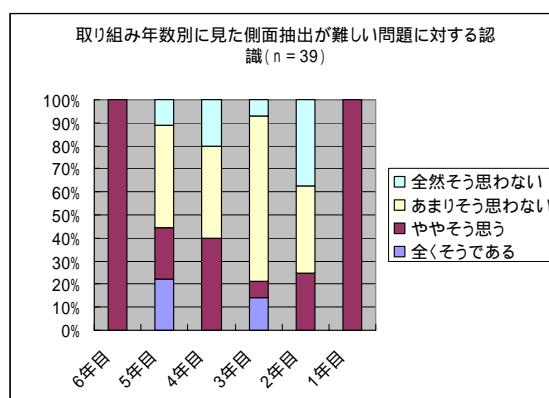


図 5-38 取り組み年数別に見た側面抽出が難しい問題の認識

図 5-38において、そう思う（＝全くそうである + ややそうである）の推移（1-6 年目）を見ると、1-3 年目までは「そう思う」が減少し、5-6 年目には増加している事より、3 年目まで省エネ等の削減活動を行った結果、活動が行き詰まり新たな側面を考え出す事に苦労する（3.4.1.2.3 全国の大学における新たに検討されている ISO14001 活動の考察参照）と言える。

5.4.1.3 まとめ

取り組み年数別に見た問題点は 7 点に分類される事がわかった。

(1) 取り組み年数が増えるにつれ、問題の認識が低くなる問題

<学生参加が少ない>（図 5-18 を参照）

<予算（審査費用）の工面が大変だ>（図 5-20 を参照）

これらは、取り組み年数が増えるにつれて問題の認識が低くなる事がわかった。

(2) 2 年目以降問題認識が増加傾向にある問題

<中心人物の転勤後の継続が難しい>（図 5-6 を参照）<ISO14001 の規格の用語が難しい>（図 5-10 を参照）<法的理義が難しい>（図 5-26 を参照）

これらの問題の中核は、「中心人物の転勤後の継続が難しい」事にあり、引継ぎがうまくいかない事によって規格の用語や、法律を理解する事が難しいと感じる事が考えられる。

(3) 1-4 年目にかけて問題認識が減り、5 年目以降増加する問題

<目的が早く達成してしまう。（活動がマンネリ化してしまう）>（図 5-22 参照）

<教職員の無関心・周知徹底が難しい>（図 5-4 参照）<他人任せで無関心の人が多い>（図 5-8 参照）<EMS による明確なメリットが認識しづらいという意見が定着している>（図 5-34 参照）<トップダウンの指揮命令系統がうまくいかない>（図 5-24 参照）<内部監査員の増員・資質向上が難しい>（図 5-12 参照）<事務主導で動いたため、教員との連携が難しい>（図 5-36 参照）

これらの問題の中核は「活動がマンネリ化してしまう」事にあると考える。なぜなら取り組みを始めて 4 年間は取り組むべき目標があり、取り組みによる効果が得られる事から、トップや教職員その他の周りの人の関心を得て、EMS によるメリットがあると認識してもらい、内部監査による改善も見られ、教職員と連携が図られると考えられるからである。しかし、目標がある程度達成されて活動がマンネリ化し始めると、周りの関心が薄れ、明確なメリットも認識しづらくなり、内部監査による改善も見られなくなる事が考えられる。

(4) 1-3 年目にかけて問題認識が減り、4 年目以降増加する問題

<側面抽出が難しい問題>（図 5-38 参照）

(3) に準じるものがあるが、3 年目までは省エネ等の削減活動を行った結果、活動が行き詰まり新たな側面を考え出す事に苦労する（3.4.1.2.3 全国の大学における

新たに検討されている ISO14001 活動の考察参照) と言える .

(5) 取り組み年数が 5 年目以降まで問題認識が上がらない問題

< 予算 (人件費) がかかる > < 認証取得が目的になり , 継続的改善への関心は次第に薄れていく >

これらの問題点に対する認識の変化は今後注目すべきである .

(6) 取り組み年数が増えても認識が変わらない問題

< 特定の担当者に偏る >

この問題は , どの年数においても問題と認識されている事より , 今後も問題になる事が予想される .

(7) 取り組み年数によって違いが見られなかった問題

< 大量の文書作成へのモチベーション維持が難しい >

< 研究・教育活動への影響評価が難しい >

< 普段の業務に EMS が浸透していない >

これらの問題点に対する認識の変化は今後注目すべきである .

取り組む項目によって , 取り組む年数による推移は様々であるので , 今後は取り組み年数との関係に注意して活動を行う必要があると言える .

問題点の取り組み年数別による分類を表 5-2 に示す .

表 5-2 問題点の取り組み年数別による分類

問題点の分類	問題点
取り組み年数が増えるにつれ , 問題の認識が低くなる問題	学生参加が少ない 予算 (審査費用) の工面が大変だ
2年目以降問題認識が増加傾向にある問題	中心人物の転勤後の継続が難しい ISO14001 の規格の用語が難しい 法的的理解が難しい
1-4年目にかけて問題認識が減り , 5年目以降増加する問題	目的が早く達成してしまう (活動がマンネリ化してしまう) 教職員の無関心・周知徹底が難しい 他人任せで無関心の人が多い EMS による明確なメリットが認識しづらいという意見が定着している トップダウンの指揮命令系統がうまくいかない 内部監査員の増員・資質向上が難しい 事務主導で動いたため , 教員との連携が難しい
1-3年目にかけて問題認識が減り , 4年目以降増加する問題	側面抽出が難しい問題
取り組み年数が 5 年目以降まで問題認識が上がらない問題	予算 (人件費) がかかる 認証取得が目的になり , 継続的改善への関心は次第に薄れていく
取り組み年数が増えても認識が変わらない問題	特定の担当者に偏る
取り組み年数によって違いが見られなかった問題	大量の文書作成へのモチベーション維持が難しい 研究・教育活動への影響評価が難しい 普段の業務に EMS が浸透していない

5.4.1.4 全体傾向及び回答された問題点のグループ化

表 5-1 より、19 個の問題点を 3 つに分類した

1. 「役割分担、やる気（教職員・ISO 事務局以外の人）、業務の引継ぎ」の問題
 - … 「そう思う」が 75% 以上の問題点の総称
 2. 「理解（用語・法律）、やる気（ISO 事務局・学生）、改善方法（内部監査・環境活動の影響評価・活動のマンネリ化）、組織体制、審査費用」の問題
 - … 「そう思う」が 55% 以上 70% 未満の問題点の総称
 3. 「EMS の普及・浸透、人件費、側面抽出」の問題
 - … 「そう思う」が 50% 未満の問題点の総称
- 以上より、問題点の中で、「役割分担が困難である、（教職員・ISO 事務局以外の人が）他人任せである、業務の引継ぎが難しい」が最も重要視されていることがわかった。
「（用語・法律を）理解する事が難しい、（ISO 事務局・学生の）やる気を引き出す事が難しい、（内部監査・環境活動の影響評価・活動のマンネリ化に対する）改善方法を見つけ辛い」という問題は、重要視されている事がわかった。

「EMS が普及・浸透していない、人件費が高い、側面抽出が難しい」という事は、あまり問題として感じられていない事がわかった。

5.5 まとめ

問題点の認識を取り組み年数別に見ることによって、問題点を 7 パターンに分ける事が出来た。

- (1) 取り組み年数が増えるにつれ、問題の認識が低くなる問題
- (2) 2 年目以降問題認識が増加傾向にある問題
- (3) 1-4 年目にかけて問題認識が減り、5 年目以降増加する問題
- (4) 1-3 年目にかけて問題認識が減り、4 年目以降増加する問題
- (5) 取り組み年数が 5 年目以降まで問題認識が上がらない問題
- (6) 取り組み年数が増えても認識が変わらない問題
- (7) 大学によって認識が違う問題

取り組む項目によって、取り組む年数による推移は様々であるので、今後は取り組み年数との関係に注意して活動を行う必要があると言える。

又、重要度別に問題点を分類した所、3 つに分類することができた。

- (1) 「そう思う」が 75% 以上の問題点 = 問題としての認識が特に高い問題
- (2) 「そう思う」が 55% 以上 70% 未満の問題点 = 問題としての認識が高い問題
- (3) 「そう思う」が 55% 未満の問題点 = 問題としての認識が低い問題

取り組み年数によって問題点の認識のパターンが出てくる事は予想していなかった。これによって問題の性質が分かったと言える。